

れいこちゃん ごめんネ

著 者 猪 狩 真 平
| 検 出 英 男
| 印 保 泰 男

昭和38年10月25日 印刷
昭和38年11月20日 発行

¥ 280

著 者 猪 狩 真 平
発行者 小 出 英 男
印刷者 大 久 保 泰 男

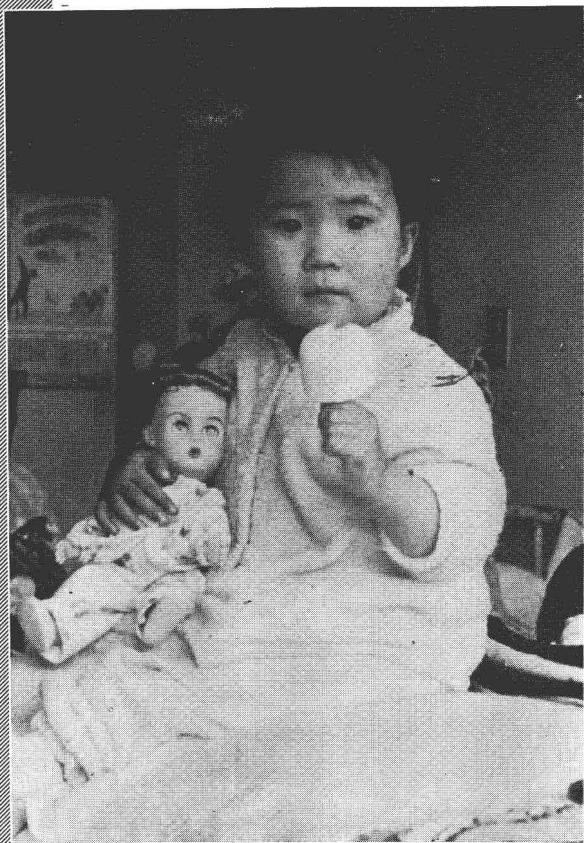
発行所 東京都千代田区三崎町 協文社出版株式会社
2の28 東光ビル内

TEL (332) 4675・5088 (331) 9539
振替口座 東京 1 8 0 2 7 7

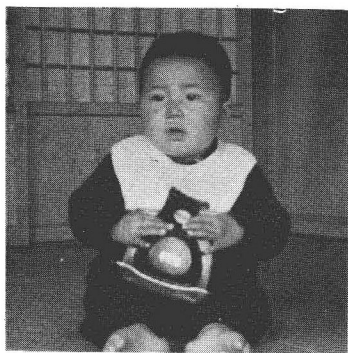
落丁・乱丁のものはお求めの書店・または本社でお取替えいたします。



白
守



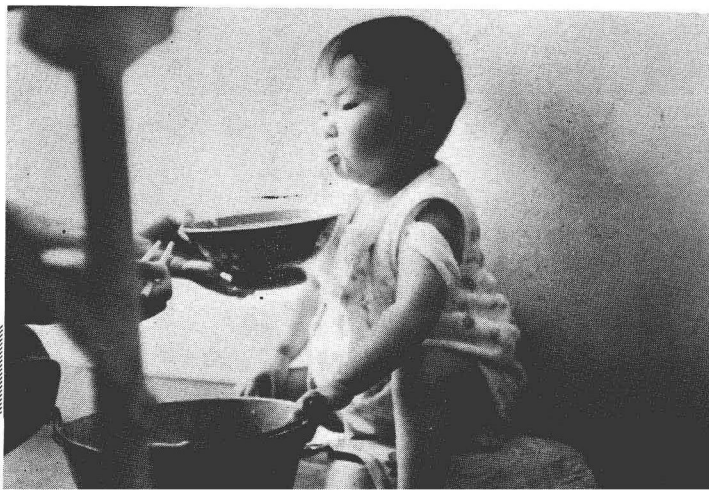
ありし日の
麗幸ちゃん

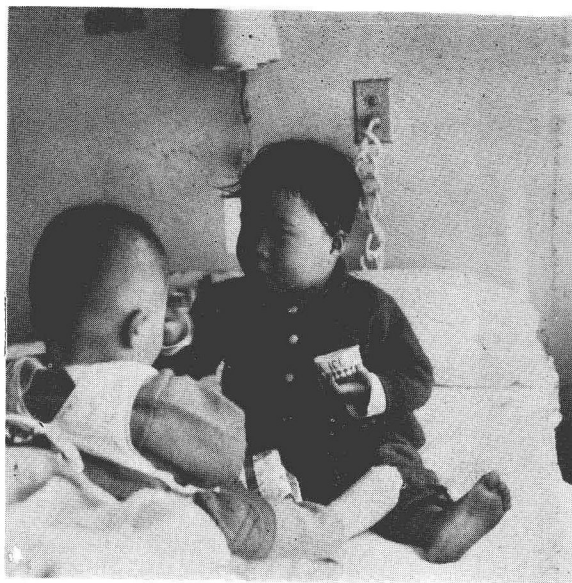


おとなしくエンチャイをして、
いたずら……………（八カ月）

51

精密検査のため、腋の下のリンパ球をとったので、ホータイ
をじゃまにしながら、ツルツルをたべる。（1年11カ月）





(右)「マトちゃんモ、アイス、ダイチユキネ」と
見舞いに来たマトちゃんに、アイスクリームをすす
める……(二年八カ月)

(下)看護婦の「コロちゃん」にだっこしてもらっ
てごきげん。(二年八カ月)





水あそびがからだにさわると思ったので制止すると、
とたんにふきげんになってしまった。(1年11ヵ月)

大好きな絵本を枕もとに、FR病院、西3病棟305号室
におちついた麗幸。(1年7ヵ月)



まえがき

これを、ぜひ読んでもらいたい……と思う人が、この地球上に少なくとも三人はいる。ひとり
はソ連のフルシチョフさん、もうひとりにはケネディさん、そして日本の池田さんである。
世間の人に聞くと「子供をなくさない親はほとんどないくらいだから、あきらめなさい」と
言われた。

「^いもつども、死んでしまった子供を「あきらめない」と言ってみたところで、どうにもならな
いことは十分承知している。しかし、私はどうしてもあきらめきれないのである。

だれをおそれ、何に備えているのかは知らないが、原水爆の実験がやかましくとり上げられ
ている昨今、たまたま娘が現代医学では手のほどこしような「白血病」にかかってしまっ
た時の「驚愕、悲嘆、憤激」……………

三人の方にはおそらく想像もできないのではあるまいか？

私は、娘の死が原水爆の実験による放射能のためだとは言わない。しかし、間接、または直

接に「影響が全然ない」とは、どなたも断言できないのではあるまいか。――

池田さんにはあまり関係のないことかも知れないが、一機何億円もするジェット機を、たとえ、破壊を防止する目的であつたにしろ、究極は、人命の軽視という結果しか考えられないようなことのために購入する余裕があるならば、なぜ「生かしたい、育てたい……」と念願する人たちの要望にこたえるよう、その道の研究機関をもっと充実させないのか……。

正確な数字は知らないが、大学研究室の年間予算が、ジェット機一機の額にもおよばないとのこと、まぼろしにおびえ、仮想敵国侵入防衛のために消費する金との差が、あまりにもへだたりすぎることに私はあきれる。

やつ当たりでおそれいるが、フルシチョフ、およびケネディさんにも一言申し上げたい。それは、実験はいくらおやりになつても結構、目的は人類発展のためだということですから……。しかし、それなら、それによつて生ずる死の灰の始末を、絶対に、安全無害にするという研究を、なぜ、早急に完成させないのか……。

「地球上の人類、否、全生物」が、放射能によつて、日々おびやかされていることは既成事実である。それでもあなた方は「実験」と「面子^{めんづ}」とをハカリにかけていらつしやる……。まっ

たく強情なお人である。

自分には、医学は全然見当もつかないことである。しかしそれだけに、娘の病状の進行、医者の手あて、つたえられる現代医学の実状等を考えて、がまんのできないいらだたしき、くやしき、憤りを覚えた。それこそ、ちだんだを踏んでわめきたかった。このような苦しみ、悲しみを二度とくりかえしたくはない……。また、他のいかなる人にもこんな思いは絶対にさせたくない……。と考へ、ぜひ多くの人たちに知っていただこうとペンをとった。

娘が死んでからもう二年になろうとしているが、放射能はその後急増したそうだし、また米ソの核実験のイタチごっこはまだやみそうにもない。おそらく放射能の弊害はますます多くなることだろう。

私のつたないこの一文が、世論への白血病に対する警鐘の一打ともなれば幸甚である。

猪 狩 真 平

目次

ありし日の麗幸ちゃん……………(3)

まえがき……………(7)

第一章 白い十字架

麗幸の発病……………(14)

はこりまみれのTV……………(21)

娘の出生……………(24)

疑 惑……………(33)

西三病棟、三〇五号室……………(40)

輸 血……………(48)

第二章 急性淋巴性白血病

ひたすらわが子のために……………(58)

また会う日まで……………(66)

特殊な現象……………(73)

第三章

愛と死のたたかい

重　い　心	81
神のみこころ	84
人間の死	89
誤診をねがって	94
消えゆく隣人	106
病院の人気者	113
小康状態	118

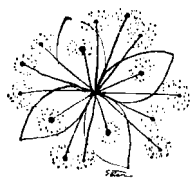
第四章

麗幸ちゃんごめんね

不信と反抗	124
病状の急変	127
白血球の増加	137
止まらない鼻血	147
麗幸の死	157
麗幸ちゃんさようなら	164
白血病について	172

診療の所見……………	(175)
麗幸ちゃんいまどこにいるのよう……………	(173)
世の親たちに……………	(183)
著者の生活をみて……………	(185)
お願いします……………	(187)
わが子人なれば……………	(191)
あ と が き……………	(200)

第一章
白い十字架



麗幸の発病

「えっ、白血病ですって！」

「えー、そうとしか診断できません。しかし誤診ということもありますから、治療しながら少し模様をみないと確定的なことは申し上げられません……。そうでなければいいんですが……ね……」

からだの力が引き潮のように抜けていくのが感じられた。膝から下が震え、押えてもなかなか止まらなかった。

新聞や雑誌などから得た貧弱な知識をもつてしても、この病気のおそろしさは十分に知っていた。なおも震える膝を両手で押え、取り亂した態度を見せまいとしたが、目頭が熱くなり、前にいる医師の白衣がボンヤリとかすんで見えた。沈黙が頭上からのしかかり、耐え難い圧力になりそうであった。

「じゃー、いったいどうすればいいんです、助かる見込みがあるんですか、それともダメなん

でしようか……」

「……………」

答えようかと迷っているらしかったが膝の上でいじっていた聴診器を机の上におき、「残念ながら……今の医学では手のほどこしうがありません。お父さんにだけハッキリと申し上げておきますが、マアーおそらくはダメでしょうナ。長くて一年、まれには二年ぐらいもつ人もいますが、小児の場合は病気の進行が特に早いようです。なんともお気のどくですが……」

「……………」

「それから、これは余計なことかも知れませんが、この病気にかかった子供さんの親として、考え方が二とおりあると思うんです。一つは、とにかく現在の医学でできるかぎりの事をつくしてみるということです。その代わり、苦痛を長期間にわたって与えることになります。もう一つは、あまり医者にかけないで、つまり注射や輸血などで痛みを味わせないようにし、好きほうだいのことをさせて、短い一生を終わらせるという方法です。どちらを選ぶかはご両親のお考え一つですが……」

病気に対する考え方を、親切に説明しているつもりであろうが、一語一語が耳の中に突き刺